

LL 授業教材の利用開発研究 I LL の定義, 歴史および現状分析

森 豪

A Study of the Use and the Exploitation of LL Educational Materials I The Definition, the History, and the Analysis of the Present Situation of LL

Tsuyoshi MORI

What is "LL"? "LL" means "Language Laboratory." R. H. Walts used the word for the first time. But his system of LL could not be accepted and had been forgotten until World War II. The war attracted people's attention to foreign language education and brought about the success of ASTP. The enthusiasm for language education continued after the war. The development of mechanical devices, the new theory of language, and the government(NDEA) supported such a movement. LL spread rapidly throughout U. S. A. Japan was under the influence of such a development of LL.

LL system changed according to the development of mechanical devices. At first an audio system played a very important role in LL. But recently a visual system attracts students' attention. Although formerly LL room was a room for hearing and conversation, it becomes a room for watching, reading, and writing as well as hearing and speaking now. Such a multifactorial LL system is our ideal LL.

I

本研究は、近い将来予定されているLL教室設置に備えて、LLとはいかなるもので、いかなる歴史をもち、現在いかなる状態にあるのか、またこれから本学で使用するとすれば、いかなるものが授業を提供する側にも授業を受ける側にも適切と思われるか、を考察するもので、本学の昭和63年度研究助成を受けたものである。

本研究のプラン提出が昭和63年9月、承認されて教材と器材の発注をしたのが11月であった。12月頃より器材が揃い始めたが、LL実験授業開始直前まで完全に揃わなかった。手元に教材や器材がないまま重ねる検討は空論であつてもどかしいこと限りなかったが、いたしかたなく、基本路線を確認し、その路線から逸れた事態に対処できるような備えをし

ておくことにせざるをえなかった。

本研究の基本路線とは、以前よりLLA(ランゲージ・ラボラトリー学会)等に於ける情報収集によって注目していた映像を使った授業であり、キャプション(Closed Caption)を使った授業であった。そのための映像教材や器材がどうにか到着し、研究が始まったが、その研究を進めるのに大いなる手助けとなったのが、本学の図書館の視聴覚教室の使用であった。揃わぬ教材や器材に焦りながら繰り返していた検討会で、当時語学用の教室にはテレビが一台も備わっていない、本研究で購入したテレビも、まず研究室で研究用に使わねばならず、エレベーターがなく研究室と教室を移動させることができないありさまでは、教室での実験成果が期待できないのではないかと、研究を教材分析に限るべきではないか、という意見が出たのに伴って、図書館の視聴覚教室

使用の案が出された。そこで図書館に恒常的な視聴覚教室の使用を願ったところ、有難いことに使用が許可された。許可されたとは言っても、視聴覚教室は全学的なものであり、語学教室だけのものではないこと、更に視聴覚教室はLL教室ではなく語学学習には不向きな面があること、などの問題が生じた。そこで、英語の授業のために恒常的に使わせてもらうが、他の教科で使用希望があれば、遅くとも一週間前に知らせてもらえれば、その時間は視聴覚教室を使わず、普通教室を使用することにした。そして視聴覚教室のLL授業には不向きな面は、逆にLL教室の特質を意識させてくれるのではないかと考え、LL教室に通じる面と通じない面を備えた視聴覚教室での実験は、成果が上がるのではないかと期待するようになった。この視聴覚教室とLL教室の相違についての考察は、本研究の報告の重要な一部となっている。

平成元年度になるとともにLL実験授業が始まった。その報告が以下の論文である。本研究の報告は、三部からなる。第一部は、「LLの定義、歴史および現状分析」で、LLの定義と歴史を説明すると共に現在のLL教育を分析し、音声言語重点主義から文字言語や映像を加えた多面的で柔軟なLLがこれからのLLであることを指摘した。第二部は、「ビデオ教材とキャプションによる授業研究」で、いわゆる教育用ビデオ教材である *Switch On* による授業とキャプション付き映画『卒業』による授業についての考察である。第三部は、「映画とその原作文学作品による授業研究」で、映画『卒業』の日本語字幕付き、キャプション付きを使用すると共に原作を読む授業についての考察である。

第二部と第三部は、第一部の多面的なLLという指摘に基づき、映像と文字言語に注目した授業方法についての考察である。映像は、それも特に映画は、学生の興味を強く引くものであるが、授業で使用する際には幾多の問題があり、効果的に使用するために絶えず工夫をしなければならぬ。開発的でなければならないのである。本研究は、「LL授業教材の利用開発研究」と題しているが、そこでの「開発」の意味は、本報告の段階では、既存の教材の「開発的、創造的利用」の意味である。研究の結果、教材をそのまま利用して授業が効果的になることはないことが分かった。「開発的部分」が非常に多いのである。

以下、研究の報告をしてゆくが、まずLLの定義についての考察から始めたい。

II

LLとは、“Language Laboratory”（言語学習室）の略語である。その定義に関して、高本（1986）が次のように言っている。

あれから30年近く経たけれども、LLの定義づけは、今でも難しい。「テレコ一台あればLL」という10年ほど前の説明は、昨今のハイ・テク時代にも通用するかと思われる。「機械や器具を用いて、英語などのことばを学習したり、指導したり、学習や指導と関係のあることを研究したりするところ」と言えば、中学生にも解ってもらえるであろう。そして、これでLLの定義は一応成り立つだろうと思っている。少なくとも、これでLLの現実を説明することにはなるであろう。¹⁾

高本の言う「あれから」の「あれ」の意味する時は1958年で、その年、彼はミシガン州のリンカーン・ハイスクールの Language Room を見学に行き、同じ見学者の米人同士が、「LLとは、Language Laboratory のことだ」、「ああ、そうか、ただそれは一体どういう意味なんだ」とやりとりしているのを耳にしたらしい。当時もまだLLの定義は、難しいものであった。その頃と今も変わらないと言う。「テレコ一台あれば、LL」という十年前の定義がまだ有効であると言う。そのうえで高本は、「機器を使った言語の学習、指導、研究をするところ」という自らの定義を無難なものとしてあげている。

高本が米国を訪れた1958年は、LLの歴史に於いて、重要な年である。“LL”という用語は、1924年にオハイオ州立大学の Ralph H. Walts が使ったのが、最初である。彼は先駆的なLLを開発したが、支持を得られず、彼のLLは徐々に使われなくなった。それから二十年ほどたって、第二次大戦中に外国語に対する関心が異常なほど高まった。それは特に軍政上に於ける必要性からの関心の高まりで、軍のASTP（The Army Specialized Training Program）（米国陸軍各科専門教育計画）が立案された時、外国語教育もその重要な一環と考えられ、「語学教育に関する課程」が設けられ、1943年4月から一年間実施され、大成功を収めた。その大成功の結果、

A S T P と言えば、この軍の集中的語学教育をさし、“Army Method”と呼ばれるようになった。A S T P の成功の原因は、戦争を背景にした学校当局、教師、学生の異常なほどの熱意とそれに基づいた異常なほどの勉強時間（当時の大学の通常の語学学習時間の三年分を一年でこなした）、そして小グループで行われた当該言語の母国語話者との口頭練習であった。L L という面で見れば、日本、ドイツの映画、レコード、録音機が使用された。それらは教師まかせで、組織的に使われたわけではなかったが、少なからず貢献したことは否定できない。

今日言う L L が最初に開発されたのは1946年で、ルイジアナ州立大学に於いてであった。録音盤再生装置、ヘッドホン、マイクロホンを備えた20ブースの部屋で、教材も独自に録音されたものであった。それを開発した A. S. Hayes が、その部屋を“Language Laboratory”と呼び、それ以後、L L という用語が一般化していった。L L の一般化に多いに貢献したのは、1950年代始めの構造言語学の台頭である。Skinner の「刺激」と「反応」の説を土台にした“Pattern Practice”が、L L の存在意義を高めたのである。人々の間にも文字でなく、話し言葉を中心にした外国語教育への関心が高まった。L L を設置する教育機関が増加する中で、1958年を迎えるのである。

1958年には、N D E A (The National Defence Education Act) (国防のための教育に関する法律) が制定され、巨額の国家予算で外国語の整備拡充が全教育機関にわたって行われることになり、それによって L L が設置される教育機関が飛躍的に増加することになった。高本の訪れたリンカン・ハイスクールの L L もその一環として、設置されたのではないかと思われる。米国の N D E A は、日本にも影響を与えた。文部省が英語教育改善協議会の答申を受けて、英語教育改善に努力することになり、聞き、話す能力の強化を目的として1961年より5ヶ年計画で視聴覚教材設備拡充することになった。その結果、1961年以降飛躍的に L L が増加することになるのである。

日本で L L が最初に設置されたのは1951年の京都学芸大学で、1952年には南山大学、青山学院大学に設置されている。そしてこの頃、「役に立つ英語」論が台頭し、口語英語への関心が社会に、特に実業界で高まり、外国語学部や英語科が設置されるように

なった。更に重要なのは、1951年にソニーが一般用テープレコーダーの開発に成功したことである。それが L L に応用されることによって、L L の機能が高まった。機器というものは L L の核となるもので、L L の発展と切り離せない。現在までも基本設備となるテープレコーダーが開発され、社会の強い口語英語への要請があり、L L を支える教育論が盛んで、これから更に発展しようという時期が1958年で、その時に、高本は L L の中心地である米国にいたのであった。

III

1958年頃、“L L”という用語は一般化していたが、その定義については、高本が言うように、まだ定義が難しい状況にあった。その頃の代表的な定義の一つとして、J. C. Hutchinson の定義がある。Hutchinson は、「この名称は、現時点ではほとんど一種の類概念になり、従来あるときには観念、あるときには方法、技術、特別室、機械、その他さまざまな型の電子工学的方式の意味に用いられた」²⁾と述べている。L L の発生以来、L L は様々なものを意味し、今やそれらを総合する観念として“L L”という語が使われるようになったと言う。1966年に天野は、この Hutchinson の用法が「現在の日本に於ける用法にもそっくりあてはまる」³⁾と述べた。この「類概念」の意味は、日本人、アメリカ人に対する「人間」に相当するものである。“L L”と言う用語を「類概念」として使用することは便利であるが、「類概念」にはちょうど「人間」という「類概念」にも人間の基本的性質の探求が必要であるように、“L L”という「類概念」にもその基本的性質の明確化が必要である。

天野から約十年後、高本の言う「十年ほど前」の定義の一つ、河野の定義は、“L L”という「類概念」の基本的性質を考えようとしたものである。河野は、「L L とは音声を通してことばを学習するために、適正な音声教材が準備され、これを再生する装置、およびその学習を効果的にするほかの何らかの装置のある練習室をさす」⁴⁾と述べ、更に L L の成立の最低条件とも言えるものについて次のように述べている。

機能的にはある種の効果を狙った系統的授業手順が意図されていること、設備的には音声再生装

置一台のほかにもそれを助ける何らかの装置が最低限度必要になる。これは「教室に能力の異なる多数の生徒を擁する現状では、T R 一台という最低限度の設備状況に加えて、もう一步進めた設備段階（たとえばイヤホンの併用）からL L と称するのが妥当であろう」という見解による。⁵⁾

河野のL L の定義は、「言語学習のための装置を伴った練習室」であり、その「練習室」の成立の最低条件は、高本の言う「テレコー台」とイヤホン、それに教育意図の存在である。「テレコー台」というのは、最低条件であって極端な話であるが、ハイ・テクの現代に於いてもテレコが基本であることは、現在のL L を分類した次のような説明からでもよく分かることである。

L L は、その学習機能から次の三つに分類されている。

- (1) A-P型 (Audio-Passive) 「聴取型」—テープレコーダーで再生された教材の音声出力を、電氣的に再生装置の外へ一旦取り出し、ヘッドホンまたは、イヤホンを通じて聞き、練習するタイプのもの。
- (2) A-A型 (Audio-Active) 「聴話型」—A-P型に加えて、学習者が自分の声もヘッドホンを通じて同じ条件で聞けるように、学習者にマイクロホンを設置したり、あるいはテープレコーダーを設置して教師の教卓（コントロール・コンソール）から流れる音声教材を録音することが出来るものである。またA-A型では、教師と学習者間の相互通話や教師のモニター装置も付加されているものもある。
- (3) A-A-C型 (Audio-Active-Comparative) 「聴取・録音型」—通称フル・ラボ (full lab) とも呼ばれるが、学習者席にテープレコーダーが設置され、教材の音声と、自分の音声と双方で録音ができ、再生して、教材音声と自分の音声とを比較検討出来る機能を持ったもの。またこのレベルのL L では学習席はブース等で区画され、個別学習用に設営されている。⁶⁾

以上のような現代的L L の分類説明に於いて、どの型もテープレコーダーを基本装置としている。

現在、本格的L L と言えば、この(3)の「A-A-C

型」のフル・ラボである。しかしこのフル・ラボの説明は、最低条件と言ってよいもので、これに付加される関連機器は、T V, OHP, スライド投影機、アナライザー、実物投影機、V T R, マイクロコンピュータなどである。これらの関連機器を見て気がつくことは、ほとんど視覚関連機器であるという面である。そこで、気になるのが、河野の次のような説明である。

ただし機器によっては再生された音声を通して学習するという以上、ことばに内在する論理性を理知的に発見させたり、多様な発問で子どもの既成概念をゆさぶることによって思考の対立や葛藤を起こさせて新しい発見に導くというような、主として視覚に訴える授業にはL L は不向きである。⁷⁾

L L が音声による言語学習であるという定義を基盤にすれば、必然的に生じる説明であるが、現在のL L 機器の開発が視覚機器開発の方向にあることを考えると、河野の言う「不向き」な面が、これからのL L を考える上で重要なものではあるまいか。

また河野と同じように、高本は「教室が読解や作文などの文字中心の場として先取り権をもつものならば、L L は英語使用圏として確保したい」⁸⁾と言う。高本には、文字機能と音声機能の区別があり、普通教室とL L との区別がある。先にあげたフル・ラボの関連機器を見てみれば、そこに文字機能のための機器が含まれていることが分かる。すでに文字機能を備えた機器がL L に入り込んでいるのである。映像機器はすべて文字を映写するようにすれば文字機能機器になるし、特に文字機能機器としてあげたいのは、アナライザーとマイクロコンピュータである。マイクロコンピュータによるC A L L (Computer Assisted Language Learning) システムは、文字機能が重要な役割を果たすことになる。これが、現在の動向であり、これからのL L の方向である。聴覚を基本にしながらも、そこに映像や文字機能を加えたL L であり、L L の普通教室化である。金田も「音声だけのL L といった狭義に解釈せず、多角的学習の可能な楽しい英語教室としての位置づけをはかるとよい」⁹⁾と言っている。「多くの感覚器官にうったえるほど事物の理解は容易になる」¹⁰⁾と言う羽鳥も、次のように言う。

現在までのところ、ヒアリングや文法や文型のドリルがLL授業の中心になっているのは、それが一番扱いやすかったからであろう。しかし、OHP、スライド、テレビなど視覚的な手段が利用されるようになったいまでは、ちょっとくふうをすれば、読むこと（内容理解）や作文の授業にもLLは使えそうである。せっかくお金をかけてLLを作るのであるから、LLはいろいろなことに使うべきである。教育工学的な考え方が普及してきた現在、従来のLLの使い方にとらわれずに種々の使い方が開発されるべきであろう。¹¹⁾

高本が普通教室のものとした「読解」や「作文」が「従来のLLの使い方にとらわれ」ない新しいLLの在り方として明確に述べられている。本研究は、これらの新しい方向を目指し、聴覚機能ばかりでなく、視覚機能（映像と文字）を使ったLLについての研究を試みるものである。

上記の引用で羽鳥が言う「教育工学」の根本となる考え方は、「生徒にとって最適な教育課程を考えてやること」¹²⁾である。学生には、学習意欲に溢れた学生から、出来るだけ楽をして単位を取ることだけが望みの学生までおり、学生の意向に沿うばかりが「最適な教育課程」ではなく、時代に迎合するばかりが「最適な教育課程」でもないであろう。しかし学生が何を求めているかと言うことを知る努力は、欠いてはならないと思われる。今回も、LLに関する学生の関心について調査を試みた。次にその調査の結果について述べてみたい。

IV

平成元年度4月に英語教室で、「LLに関するアンケート」調査を行った。第一学年と第二学年の17クラス、総計782名についての調査は、以下のような結果であった。数字は各項目に当て嵌まる人数、()内は全体に占める割合である。

A. 1. 高校にはLLがありましたか。

はい 218 (27.9) いいえ 564 (72.1)

2. 1で「はい」と答えた場合、授業でLLを使いましたか。

はい 80 (36.7) いいえ 138 (63.3)

3. 2で「はい」と答えた場合、

LLの授業はおもしろかったですか。

はい 16 (20.0)

どちらともいえない 49 (61.3)

いいえ 15 (18.6)

LLの授業は役に立ちましたか。

はい 8 (10.0)

どちらともいえない 53 (66.3)

いいえ 19 (23.8)

B. 4. 高校の英語の授業でテープレコーダーを使いましたか。

はい 493 (63.0) いいえ 289 (37.0)

「はい」と答えた場合、

具体的な回数を答えて下さい。

週一回以上 281 (57.0)

月一回以上 124 (25.2)

その他 88 (17.8)

テープレコーダーを使用した授業はおもしろかったですか。

はい 14 (2.8)

どちらともいえない 376 (76.3)

いいえ 103 (20.9)

テープレコーダーを使用した授業は役に立ちましたか。

はい 58 (11.8)

どちらともいえない 346 (70.2)

いいえ 90 (18.3)

C. 5. 高校の英語の授業でビデオを使いましたか。

はい 56 (7.2) いいえ 726 (92.8)

ビデオを使用した授業はおもしろかったですか。

はい 33 (59.0)

どちらともいえない 20 (35.7)

いいえ 3 (5.4)

ビデオを使用した授業は役に立ちましたか。

はい 12 (21.4)

どちらともいえない 33 (59.0)

いいえ 11 (19.6)

D. 6. テープレコーダーの授業に興味がありますか。

はい 193 (24.7) いいえ 589 (75.3)

7. ビデオの授業に興味がありますか。

はい 498 (63.7) いいえ 284 (36.3)

8. 洋画を見ますか。
はい 710 (90.8) いいえ 72 (9.2)
「はい」と答えた場合、具体的な回数を教えて下さい (ビデオも含む)。
月一回以上 444 (62.5)
年一回以上 192 (27.0)
その他 74 (10.4)
9. テレビ、ラジオの英会話番組を見たり、聞いたりしますか。
はい 103 (13.2) いいえ 679 (86.8)
「はい」と答えた場合、具体的な回数を教えて下さい。
毎日 0 (0.0) 定期的 10 (9.7)
時々 82 (79.6) その他 11 (10.7)

V

以上のような結果について、その顕著な特色をあげると、まず本学の学生のうちLL体験者は、少ないことがあげられる。回答者のうち10.2%である。それに対し、テープレコーダーを使った授業の体験者は63%で、高校の英語授業に於いてテープレコーダー使用が一般的であることが分かる。音声機能の訓練の重要性が一般に認識され、LLを使わずとも、テープレコーダーがよく使用されているようである。問題は、そのテープレコーダーの授業体験者のうち、わずか2.8%の者が「おもしろかった」と答えているにすぎないことである。「役に立った」と意識的に答えられる者が、少し増えて11.8%である。大多数の者が、「どちらでもない」という答えだが、テープレコーダーの授業に興味があるかどうかということになると、75.3%の者が「興味がない」と答えている。音声機能重視は、戦後の英語教育の趨勢で、テープレコーダーはそのために活用されてきて、LLの中心的機器でもあったわけだが、生徒には「興味がない」ものになってきている。それに対し、ビデオを使用した授業に興味をもつ者は、63.7%になっている。高校でのビデオ体験者は、LL体験者より少なく、7.2%にしかすぎないが、ビデオ体験者のうち「おもしろかった」と答えた者は59.0%にもぼっている。しかし「役に立つ」ということになると減って21.4%であるが、テープレコーダーの11.8%を上回っている。ビデオ教材への関心が高いことは、否定できない。そしてそのビデオ教材として魅力のあるのが、90.8%の者が見るといふ映画である。

このアンケート結果は、本研究に於ける我々の意図に一致するものであった。LL教育界の最近の傾向分析によって、視覚教材重視の方向を本研究の方向と考えていたわけであるが、本学学生についての調査によって、学生の関心傾向も視覚教材重視の方向にあることが分かった。教育的研究によって得た方向と学生の望む方向が一致していれば、それは「適正な教育課程」に少しでも近付けるのではないかと思われる。

VI

本研究の具体的内容、即ち視覚教材のうち教育用ビデオによる授業と文字機能を備えたキャプション付き映画による授業については、本研究の「II」と「III」に於いて述べる。ここで触れておきたいことは、本稿の始めに述べた図書館の視聴覚室使用に関することである。本学図書館の視聴覚室は、「テレコ一台でもLL」という定義によれば、立派なLLであるが、それにもう一段階加わった「イヤホン」になるとLLには不十分となる。しかし最新のビデオ・プロジェクターがあり、それも手元で操作ができる。教材をそのまま映像で提示できるOHCがある。スクリーンが整い、音響装置もある。視聴覚室としては十分であり、LLとしては不十分なのである。そこで行う研究授業もその教室設備の影響を受けざるを得ない。授業をやっているあいだに、LLとして不備な点に気付くが、その不備な点こそLLをわざわざ作ることの理由因子であり、LLの利点である。視聴覚室を利用することにより、LLの利点を様々に意識することになり、またLLを作るのであれば、こういう点に留意してほしいというようなことを考えるようになった。以下、視聴覚室を使いながら、気が付いたLLの利点やあるべきLLの理想の一端をあげることにする。視聴覚室をAV室と呼ぶ。

1. LL教室の位置と大きさ

本研究の研究者は主に新教養棟9号館で、図書館まで距離が在り過ぎた。準備室がAV室の近くにあつて教材をそこで整えることが出来ればよいが、出来なかつたので多くの教材を運ばねばならず、負担が大きく、また教材が制限された。LL教室は、準備室を近くに備えているべきである。準備室では、教材保管と同時に教材作成、編集が出来るとよい。

現在のA V室の準備室は操作室で、これ以外に編集器材を備えた部屋が必要である。

教室の大きさに関しては、現在のA V室は56席であるが、机が小さく、同じ程度の席を作るのであれば、現在のA V室と準備室を合わせた広さが必要である。机はテレビ・モニターを備える必要があり、椅子も現在の観賞用の椅子では不十分である。

2. LLの多種の機能を備えた教卓(コントロール・コンソール)

LLの教卓には多種の機能が備わっており、便利である。しかしあまりにも多種であるため、操作が複雑に思え、操作部分を見るだけで使う気をなくす人もあるようだ。LLの教卓では基本的に次のような操作が可能である。

(1) 出席判定。座席および生徒名が図示される。すべて指定席で、コールする必要もなく出欠席がすぐ分かる。学生把握は容易で確実である。A V室では、ロール・コールによる一般授業と同じ形式で一斉点呼を行った。指定席にして、図を作れば、LLの指定席と同じ効果が出る。それと逆に、LLであっても指定席を使わなくてもよい。指定席にしない場合、自由すぎてLLの機器に対する責任感が生じず、機器が破損しやすく、だれが壊したのか分からないというようなことが生じるのが心配である。

(2) ヘッドホンとマイク使用による教卓と生徒席(ブース)相互間の応答。A V室では、一般教室と同じである。教師と学生、学生相互で適宜応答が行われる。自由であるかわりに、他人の声に煩わされる。箱型の完全ブース型のLLでは、自由に応答できず、させず、個々の練習が重視される。他人の声に煩わされない代わりに、自由な活発な雰囲気はなくなり、孤立する。そこで、この両方の長所を生かす方法がよい。即ち、ブースの壁を取り払い、お互いが見え、聞こえる普通教室の体裁を取りながら、必要に応じてヘッドホンやイヤホンを使用して、個々の練習をするような形式である。

(3) テープレコーダー(音声)とビデオコーダー(音声と映像)の送出。A V室では、教卓にビデオ・デッキが置かれ、ビデオ・プロジェクターによる映像、音声の送出ができた。しかし音声テープの送出装置がなく、ラジ・カセを使った。ラジ・カセでは、音声の調節が難しい。LLでは、音声テープ・ビデオテープの両用が可能である。レーザー・ディスクも接続可能である。A V室がビデオ装置のみなので、

レーザー・ディスク教材もビデオ化して使ったが、不便であった。

(4) 教材提示装置。A V室には、OHCがあった。教材をそのまま提示できる。映像黒板と言える。ただ画面が限られるので、黒板そのものとは言えないが、非常に有効な装置である。従来、OHPがあったが、OHPはOHP用のシートに書かねばならなかったのに対し、何に書いてあっても、そのまま映し出すのである。OHPより用途が広く、便利である。教科書のページをそのまま映写する。個々の単語や文についての説明を、映写した単語、文を指し示しながら、細かく行うことができる。またその日の英字新聞記事をそのまま映し出して、教材とすることができる。また内容把握の参考になる写真をそのまま映写できる。しかしA V室のOHCの欠点は、映写装置がビデオ・プロジェクターであるため、部屋を暗くしなければならないことであった。更に文字の映せる範囲が狭いため画面の周辺部分が歪むことである。LLでは、各ブースのモニター・テレビに映写されるので、部屋を暗くする必要はない。ただモニター・テレビは、画面が小さいという欠点がある。しかし14インチ以上あれば、十分読める。

(5) アナライザー。回答・分析装置である。A V室にはなく、小テストや簡単なアンケートを取る場合、用紙を配って、後で採点および統計をとる必要があった。アナライザーは、このような場合に有効である。口頭でも、映像でも、テープでもよいが、質問して、学生が自分の席の回答装置で答えると、即座に採点され、統計が出てくる装置である。小テストは、学生の理解力の測定ばかりでなく、理解を深め、また集中力を高めるためにも重要であり、この装置は有効である。

3. 多種の機能を備えた生徒席。A V室では、机と椅子があるのみである。LLでは、従来各席はブースと呼ばれ、区切られた、箱型の完全な個室であった。その欠点は、孤立化、機械化である。生き生きとした生きものとしての授業の生命が分断されて、集中力、やる気を失い、寝ていることが起こった。それで、ブースの壁、仕切りを取り払う傾向にある。普通教室の明るさと一体感をもった上で、イヤホンによって個々の練習、個々への集中化を図ろうとする。LLの普通教室化の一つの具体化が、ブースの壁を取ることである。

(1) モニター・テレビ。映像時代のLLを象徴す

るものである。教卓から送られる映像・音声を再生する。モニター・テレビの設置には、大きなテレビを部屋に置くものと各ブースに置くものがある。各ブースにある方が見易い。しかし問題は、テレビ受像機が大きく、場所をとることである。インチ数を小さくすれば、見にくい。そこで14インチは確保したい。インチ数が大きすぎれば、これも見にくい。学生各々に一台か、各机に一台。12インチを各学生に配置するよりは、14インチを各机に一台、二人の学生の間で置く方がよい。AV室にはなく、ビデオ・プロジェクターによる一斉映写であった。これは集中度を高めるうえで大いに効果があったが、部屋全体を暗くする必要があり、書く作業には不便であった。モニター・テレビは、部屋を暗くする必要がない。

(2) テープレコーダー。教卓より送られた音声の再生と録音をする。AV室にはない。録音したもので家庭学習ができる。マイクと繋いで自分の声も録音し、比較も可能である。

(3) ヘッドホン。マイク。LLの個別学習という重要な機能を果たすために必要である。

(4) アナライザー回答装置。一問毎に五つぐらいのボタンから選んで答える。以上の生徒席の装置は、機の半分以下のスペースに収まることが望ましい。テキスト、ノート、辞書を置くスペースを欠かしたくない。LLに変化をもたせ、LLを多様な形で使うには必要なことである。AV室には全く余裕がなく、小さい机は使いにくかった。AV室としては当然のことながら、LLとしては不十分である。

AV室には、空気調節装置があるが、LLに於いても当然必要である。またAV室には、黒板があるが、LLの普通教室化にはなくてはならないものである。特に機器を使う必要がない場合、黒板を使う普通の授業をすることができる。またAV室には補助員がいて大いに助かったが、LLに欠かせず、LLの成功、不成功を決めるのが、専任の技術的補助員の存在である。成功しているLLには、必ず優れた技術スタッフがいる。

VII

以上、LLに見立てて使用した視聴覚室で気の付いたLLの設備の特色、利点について述べた。LLの普通教室化という本研究の一つのテーマに沿って述べたつもりだが、LLが普通教室化されるのなら、

その逆の普通教室のLL化ということも考えられそうである。生徒席の「イヤホン」がLLの基本とするなら、管理の面で無理がある。しかし普通教室にテレビ・モニターを備えることは可能である。ビデオ・デッキも備えられれば、かなり有効に使えられると思われる。そこで、本研究作業の一環として、29インチ テレビ・モニターを普通教室に運んで実験した。その結果、視聴覚室で行ったビデオ授業と同じような形式の授業をすることができた。できることはできたが、同じような形の授業であって、質的に同じではない。まず一教室に一台のテレビでは、不十分で、よく見えず、不平を言う学生がいた。特に画面の文字は後部座席ではとても見えない。音声も大きくすれば、教室外に迷惑がかかる。また廊下からの騒音も邪魔であった。学生の集中力も低下した。ヘッドホンやマイクを使った伝達の正確さには及ばない。ビデオ・プロジェクターの大画面には及ばない。防音室には及ばない。不備な点が多いが、一応のビデオ授業が可能であり、状況によれば十分な授業も可能である。

最後に述べておきたいのは、自習室である。教室を使った英語授業は、第一学年と第二学年の二年間のみで、本当に実力をつけるには、個人の自習が欠かせない。その助けをするのが、自習室である。自習室には、ビデオ機器を備え、興味に応じて視聴することができるようにする。各種のビデオ教材、映画、NHKの語学教材、衛星放送によるものなどを置き、各種の検定用学習教材をそれに加えて置く。そしてこれからの学習の有力な助けとして、CALL教材がある。コンピュータを使った自習教材としては、CAI (Computer Assisted Instruction) があるが、CAIは、「教育」(Instruction) に重点があり、CALL (Computer Assisted Language Learning) は「言語学習」(Language Learning) に特色がある。コンピュータの助けによって自分の能力に応じて学習していく。大々的に授業の中に取り入れようとするよりも、現段階では、自習室に備えることを目指していくべきであり、ビデオ教材研究と共に期待されるこれからのLL研究方向である。まだまだ試行段階であるが、これからの課題として研究を進めてゆくべきだと思われる。

尚、本研究は本学の昭和63年度研究助成を受けたものである。

注

- 1) 語学ラボラトリー学会 (LLA) 関東支部: LL教育機器活用ハンドブック, 1, 愛育社, 東京, 1986.
- 2) E. Hocking: Monograph 2, 29, National Education Association, Washington, D. C., 1964.
- 3) 天野一夫: ランゲージ・ラボラトリー総論, 現代英語教育講座, 11, 4, 研究社, 東京, 1966.
- 4) 河野守夫: 学習環境の企画と整備, 講座・英語教育工学, 4, 122, 研究社, 東京, 1973.
- 5) 同書.
- 6) LL教育機器活用ハンドブック, 7-8.
- 7) 前掲書, 123.
- 8) 前掲書, 4.
- 9) 金田正也: 英語学習の深め方・LL, 英語指導法ハンドブック, 3, 958, 大修館, 東京, 1983.
- 10) 羽鳥博愛: LL指導の理論と実践, 16, 桐原書店, 東京, 1978.

11) 同書, 4.

12) 同書, 4.

参考文献

- 小川芳男(編): 英語教授法辞典, 三省堂, 東京, 1982.
大内茂男(編): 視聴覚教育の理論と研究, 日本放送教育協会, 東京, 1979.
K. Ahmad: Computers, Language Learning and Language Teaching, Cambridge Univ. Pr., Cambridge, 1985.
金田正也: ランゲージ・ラボラトリー, 明治図書, 東京, 1972.
M. Geddes: Video in the Language Classroom, Heinemann Educational Books, London, 1982.
鈴木博他(編): 講座・英語教育工学1-5, 研究社, 東京, 1972.

(受理 平成2年2月20日)